ヴィオレ・ル・デュクによるトゥルーズのサン・セルナン
教会堂の修復についてON THE RESTORATION OF SAINT SERNIN CHURCH OF TOULOUSE
BY VIOLETT LE DUC羽生 修二*
Shuji HANYU

The restoration of the cresting and roofing of Saint Sernin Church in Toulouse is at the heart of an important debate today, since it is difficult to maintain the elements conceived and realized by Viollet le Duc between 1860 and 1879.

The High Commission for Historic Monuments decided for the return to the state before 1860, since Viollet le Duc's restoration was not based on the incontestable archeological evidence.

The present paper deals with the relationship between theory and practice in his restoration works of Saint Sernin Church.

Keywords : Viollet le Duc, restoration, restitution, Saint Sernin Church of Toulouse

ヴィオレ・ル・デュク, 修復, 復原, トゥルーズのサン・セルナン教会堂

1. 序

フランス・ロマネスクの建築遺構で最大規模を誇るトゥルーズのサン・セルナン教会堂 (Église de Saint Sernin de Toulouse) は, サンチャゴ・デ・コンポステラ (Santiago de Compostela) への巡礼路に沿って立てられた, 典型的巡礼路教会堂である。しかし, 現在の姿は19世紀の修復によって大幅に形状が変更されている。とくに屋根と軒廻りの形式は, 当初のものではなく, 修復を担当したウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ・ル・デュク (Eugène Emmanuel VIOLETT-LE-DUC, 1814-1879) の創作なのである。それゆえヴィオレ・ル・デュクの修復に対する非難の声は, 工事がまだ完了しない1874年にはすでに起きている。たとえば南部考古学会 (Société Archéologique du Midi de la France) のキャリエール修院長 (Abbé M.-B. CARRIÈRE) は, 「この記念物でもっとも貴重な後陣部分の現在の姿は, 会場に来た観衆全員に非難と惜念の気持ちを抱かせる演奏会を催したようなものだ」¹⁾とし, 後陣部分の復原を嘆いている。そして, ヴィオレ・ル・デュク没後百周年に当たる1980年²⁾には, 現在のサン・セルナン教会堂の主任建築家であるイヴ・ボワレ (Yves BOIRET) から「ヴィオレ・ル・デュクの修復を修復する」計画案が提示された。ボワレの報告によれば, 19世紀の修復で

大がかりな形状の変更がなされた, 屋根部分の損傷が今日甚大となり, 緊急に修復しなければならない状態にある。そのために次の二者択一が迫られているというのである。つまりヴィオレ・ル・デュクの修復を歴史の一樣相として尊重し保存するか, または19世紀の修復を放棄し, ヴィオレ・ル・デュクの介入以前の姿に復原するか, どちらかを選ばなければならない所まで来ているのである (図-1)。

そして1990年6月6日歴史的記念物上級委員会 (Commission supérieure des Monuments historiques) は, ヴィオレ・ル・デュクの復原には考古学的裏付けがないと判断し, ヴィオレ・ル・デュク以前の状態に復原することを承認したのである³⁾。

本稿は今日再び修復が行わなければならない状況にあるトゥルーズのサン・セルナン教会堂において, ヴィオレ・ル・デュクがいかなる理論で修復を行ったか検討し⁴⁾, ヴィオレ・ル・デュクの建築理論との関係を考察しようとするものである。

2. サン・セルナン教会堂の沿革

トゥルーズのサン・セルナン教会堂の創建は, トゥルーズ教区の初代司教だった殉教聖人サチュルナン (Saint Saturnin) の聖遺物を奉納するマルティリウム

* MH研究室・工修

Atelier Monuments Historiques, M. Eng.

として4世紀後半に建設されたことから始まったといわれている⁵⁾。最初の建物は、木造の簡素なものであり、聖遺物を納める所だけ煉瓦のヴォールト天井が架けられていた。敷地は現在の所とは異なり、今日のノートル・ダム・デュ・トール教会堂 (Église de Notre Dame du Taur) が立っている場所だった。聖サチュルナンの人気は、当時からかなりのものがあつたらしく、巡礼が後を絶たない状態だったらしい。そのため最初に建てられた小さなマルティリウムだけでは手狭になったので、5世紀になって現在の敷地に聖遺物を移して新しい教会堂を建設する。しかしこの教会堂もやがてサラセン人による破壊やシャルルマーニュの再建、そして再び破壊といった繰り返しを経る。そして、11世紀に入り世の中が安定するにつれて、現在のような大規模な教会堂建設の計画が立てられる。この計画は、1018年から1032年まで在位したピエール・ロジェ司教 (Evêque Pierre ROGER) が中心になって進められ、1080年頃ようやくサン・セルナン教会堂再建の工事が始まる。そして1096年5月24日ローマ教皇ウルバヌスⅡ世 (Pape Urbain Ⅱ) によって内陣の献堂式が行われる。これが現在のサン・セルナン教会堂の最も古い部分である。内陣部分に続いて1118年には外陣の側廊が完成し、身廊も高窓の位置まで立ち上がっていた。そして12世紀半ばには、内陣の回りを一巡する周歩廊やそこに放射状に並ぶ祭室、トランセプト、交差部上の鐘塔などもおよそ完成する。鐘塔は13世紀後半になって増築され、3層から5層になる。この増築工事で鐘塔の巨大な重量を支えるために交差部の4本のピアが補強され、身廊から内陣に向かう視界が狭くなっている。そのために身廊から内陣へのパースペクティヴな効果が当初と比べて減少している。

このような経過を経てサン・セルナン教会堂は、14世紀初めには全体がほぼ完成するのだが、宗教戦争の開始と共に変容する。1562年5月12日カルヴァン派が教会を占拠し、要塞として使用するために改造を行う。側

図-1 ヴィオレ・ル・デュクによって創設された軒先の破損状況

壁を増築し、そこに半円アーチの小窓を開け、大砲の砲身を出す銃眼にしたのである⁶⁾。しかしそれ以外は大きな改造を加えられることもなく、またフランス大革命による大がかりな破壊も受けなかった。それは、この教会堂がトゥルーズで最も古く重要な建物であり、そのうえ市民の聖サチュルナンへの根強い信仰があつたからに他ならなかった。それゆえ1834年に歴史的記念物総監ブロスベル・メリメ (Prosper MÉRIMÉE, 1803-1870) がサン・セルナン教会堂を視察した際、保存の上で緊迫した状況にはまっただくなかった⁷⁾。

1837年メリメの推薦によって、サン・セルナン教会堂は、歴史的記念物 (Monuments historiques) に指定され、国の補助を受けて保護されることになる。それに答えてトゥルーズ市側も独自の教会堂周辺の整備を開始する。それはメリメが「あいにく右のトランセプトの外側に、近代になって増築された聖具室がこのグループのさまざまな部分の調和や秩序を破り、その総合的效果をいささか損なっている」⁸⁾と『南仏紀行』(Notes de Voyages) で記したことに対するものだった。トゥルーズ市は教会堂に寄り添うように増築された建物を撤去し、サン・セルナン教会堂の外観をより美しく見せるために周りを広場にした。それに続いて教会堂の外観の復元が行われることとなる。メリメは、この工事をヴェズレーのラ・マドレーヌ教会堂の修復で初めて登用したヴィオレ・ル・デュクに依頼するよう、歴史的記念物委員会に推薦した。

「サン・セルナンほどの素晴らしい記念物を、熟練した、経験豊富な芸術家以外に任せられないし、任せてはならない。報告者はヴィオレ・ル・デュク氏に依頼するよう提案する」⁹⁾

そして、1845年4月18日、歴史的記念物委員会の決定が下され、ヴィオレ・ル・デュクがトゥルーズのサン・セルナン教会堂の修復計画を担当することとなる。

3. ヴィオレ・ル・デュクによる修復工事

ヴィオレ・ル・デュクの修復計画は1847年1月31日に歴史的記念物委員会に提出された。メリメはこの修復計画案を評価し、

「ル・デュク氏の計画案はたいへん結構だと思う。まずこの記念物でもっとも美しい後陣から着手し、後陣の室内と外壁を完全に復元する。それから時間と予算が整ったら、残りを修復するというものである。最優先すべきことは、それ自身醜悪であり、ヴォールトにとっても嘆かわしい屋根形式を変えることである」¹⁰⁾

と述べている。その時同時に提出された見積書と報告書には修復費用として、574222フラン必要だとし、大部分は屋根形式の大がかりな変更に合わせていた。しかし市の財政困難と1848年の革命勃発などの事情ですぐ

に予算が下りず、工事開始は1860年まで待たなければならなかった。

修復工事の内容については、ヴィオレ・ル・デュクを補佐して現場監理を行っていた地元の建築家、J. エスキエ (J. ESQUIÉ)¹¹⁾ が詳細な記録¹²⁾を残している。ここでは、それを基に工事の経過を辿ってみる。

1860年

10月22日 修復工事開始。

10-11月 モルタルで覆い隠された放射状祭室、後陣、トランセプト東面の外壁をはつて石と煉瓦の石組をよみがえらせる。南側袖廊の祭室間に増築された聖具室2室を取り壊す。なぜなら、「これらの聖具室は美術的価値がまったくなく、後陣の注目すべき部分を不愉快に覆い隠していたから」¹³⁾。

聖具室の除去工事の際、ロマネスクのクリプトがその下にあったことが発見され、それを保護するためにコンクリートの防水層をその上に設ける。

バットレスの解体と再建。

1861年

後陣とトランセプト祭室の外壁基部における石組の入れ替え。その際に当初材のボケール石 (pierre de Beaucaire) だけではなく、カルカソンヌ石 (pierre de Carcassonne) も採用する。

祭室の屋根を石の板瓦に葺替える。

1861年末

バットレス2箇所と祭室9室の外壁基部の修復完了。

南トランセプトと後陣の祭室のコーナーのバットレスが全体的に再建される。

地面と第一層目のコーニスとの間に入っている煉瓦層の修復と目地の塗直し。

サン・テスプリの祭室 (chapelle Saint-Esprit) の屋根を石葺で完了。

サン・シールとサント・ジュリットの祭

室 (chapelle Saint-Cyr et Sainte-Juliette) の屋根を半分だけ石葺に替える。

持送りを彫刻する。

ヴィオレ・ル・デュクが後陣兩楯のガルグイユの図面を作成するようエスキエに依頼する。

1862年

後陣と祭室の半円蓋状ヴォールトに石の平瓦を葺く (図-2、図-3)。

祭室の室内修繕とそこに飾られた金箔塗飾り壁の撤去。

1862年5月

鐘塔修復のための「かなり複雑な」支保工の建設。

トランセプト北の16世紀に増築された屋根部分の取り壊し開始。

1863年

鐘塔屋根の修復完了。

トランセプト北の屋根部分の再建。

トランセプト南の屋根部分の再建開始。

鐘塔ピアの補強工事。

ストライキによる工事の遅延。

1863年末

トランセプト北の工事完了。

トランセプト西側に立つ小塔の屋根葺工事。

1864年

6月19日 ヴィオレ・ル・デュクは、大臣に予算の第一期分の工事が終了したことを報告している。そこで鐘塔の修復にかかった24000フランの予算超過分が追加された。

1865-1869年

工事は1865年末大幅に遅延する。そして身廊の修復は1869年突然中止となる。その理由は第二期工事にあった予算 (182000フラン) が屋根の新しい形式を再建している途中で使い果たしてしまったからである。そのために北側身廊の屋根は剥かれたままになる。それは1847年に作成され、1860年に訂正され

図-2 1860年以前の後陣部分

図-3 石葺に変更された後陣部分屋根

たヴィオレ・ル・デュクの見積額が、南仏鉄道のストによる1860～1862年の手間賃・材料費高騰で大きく超過したためである¹⁴⁾。しかし、辛うじて50 000フランの予算が市と国(1870年6月2日付)で認められる。

1870年

7月15日 戦争が勃発し、工事が中断される。

1872年12月 身廊北側部分の屋根工事が特別予算を使って完了。

1874-1878年 補正予算によって、北側身廊の敷石と装飾の工事開始。南側のルネサンス門、トゥルーズ伯墳墓の小穴、南北トランセプトの扉口の工事。

1878年末 ステンド・グラス、家具、祭壇などの修復計画が練られる。

1879年

9月17日 ヴィオレ・ル・デュク没す。工事の終章である西側ファサードの2つの鐘塔再建は、とうとう着手せずに終わる(図-4、図-5)。最終的にトゥルーズのサン・セルナン教会堂の修復工事は、合計787 600フランに達した。

4. ヴィオレ・ル・デュクによる形状の変更

1) 交換材の選択¹⁵⁾

トゥルーズのサン・セルナン教会堂において、当初から用いられていた材料は、プロヴァンス地方で産出されるボケールの石灰岩だった。しかしヴィオレ・ル・デュクはパットレス、外壁そして軒廻りに使われた石の交換材として「より強固な」カルカソヌの石¹⁶⁾を採用した。ところが、「より上質な材料」と見えたカルカソヌ石の選択には大きな誤りがあった。現在サン・セルナン教会堂の修復を担当しているイヴ・ボワレによれば¹⁷⁾、次の3点において問題が生じている。

① 選ばれたカルカソヌ石の色調は、当初のものとは大変異なり、そのうえ石目も全然違う。そのために外観

の調和が乱された。

② 柔らかい石の上に堅い石を積み重ねることは、保存すべき昔からの石組の腐食を促進させる原因となった。

③ カルカソヌの砂岩は、ヴィオレ・ル・デュクが思っていたほど堅固な石ではなく、今日では欠陥のある材料と見なされている。現に、カルカソヌ石は層面に沿って剝離しやすく、すぐ粉々になってしまう欠陥がある。そのために、雨樋が破損・欠失し、雨水が壁面に浸透する結果となった。

ところで、ヴィオレ・ル・デュクはなぜこのような誤ちを犯したのであろうか。その理由として第一に上げられるのは、多くの人々によって指摘されたように¹⁸⁾、北フランスを中心に仕事をしてきたヴィオレ・ル・デュクは南フランスの材料に関する知識に欠けていたということである。現場を実際に監督していたのは、地元の建築家エスキエでありヴィオレ・ル・デュク自身はフランス全土の歴史的記念物の修復現場を巡察するのに追われていた。そんな状況の中で、一地方の材料に関してそれほど深い知識を持っていなかったに違いない。しかし当時のトゥルーズに、もし適格な助言を与えることのできる建築家や考古学者がいたならば、このような間違いは起きなかったであろう。さらに、上で見てきたように、サン・セルナン教会堂修復の補助金が停滞し、南仏鉄道の買占め、ストなどで運搬費、材料費、人件費が暴騰している状況で、わざわざプロヴァンス地方のボケールから材料を調達するのは予算の関係で困難だった可能性もある。しかし、いずれにしてもヴィオレ・ル・デュクが交換材の選択を誤ったことは事実なのである。

2) 目地

外観ファサードの様相を変えたもう一つの原因は、石目地の塗直しによるものであった。石造建築の目地というのは、ファサードの表情に大きな影響を及ぼすばかりではなく、目塗りの方法によって時代判定や地方性を判別することが出来るほどにデリケートな要素なのである。ヴィオレ・ル・デュクによって実施された目地の塗直しは、あまりに画一的であり、しかも北フランスの建築の目地のように、極端に浮き出した仕上げにしている。

図-4 修復前の南立面図(ヴィオレ・ル・デュクによる)

図-5 ヴィオレ・ル・デュクによる南立面の修復計画案

この方法は雨の多い地方では剥がれ安く、不適切である。その上、目地の多様性によって見ることができた歴史的痕跡をすべて覆い隠してしまい、歴史的事実に対して冷徹な、「冷たい修復」の印象を強く与えることになった。

3) 屋根部分の復原¹⁹⁾

ヴィオレ・ル・デュクによるサン・セルナン教会堂の修復において、最も大きな問題となったのは、屋根の復原についてである。つまり後陣と放射状祭室の屋根葺材料を丸瓦から石の平瓦に変更したこと、そして16世紀頃に増築されたと考えられる側壁を取壊し、身廊とトランセプトに新しい屋根形式を与えたことである(図-6、図-7)。

まず後陣部分の屋根を石葺に変えたことに関しては、ヴィオレ・ル・デュクが修復計画を構想する以前に、地元の南部考古学会がすでに石の平瓦葺に変更するよう提案していた²⁰⁾。それゆえヴィオレ・ル・デュクは地元の考古学会の意見に従って、屋根葺材の変更を計画したわけである。しかし皮肉にも30年後に同じ考古学会の会員が、この石葺屋根を非難することとなる²¹⁾。ところで、こうした地元の考古学者の意見とは別にヴィオレ・ル・デュク自身も石の平瓦をヴォールトの上に葺くことは適切だと考えていた。それは『中世建築事典』(*Dictionnaire raisonné de l'Architecture française du XIème au XVIème siècle*, 1854-1868)の「板瓦(dallage)」の項²²⁾で、「木造小屋組をヴォールトに変えようと考えついた時、人はまずモルタル地の上に石の板瓦とか大きな焼瓦を葺き、ヴォールトの外迫を保護しようと思った」²³⁾とし、南仏などの教会堂によく用いられる有効な方法であると述べていることからわかる。

以上のように、ヴィオレ・ル・デュクは確信をもって後陣祭室の屋根葺材を変更したのである。しかし、彼の

デザインした屋根は「カラパス(carapace)」と呼ばれる亀の背甲のごとく堅固で、ふくれた異様な様相を呈し、さらにガルグイユやアクロテリオンのような屋根飾りを施したため、ロマネスクの簡素で素朴な後陣とはかけ離れた印象を与えてしまった。ついであるが、後陣祭室すべてに付設されたガルグイユ付雨樋は、エスキエの復原によるものであり、それが平瓦屋根の重々しい印象をより一層強める結果となった。

一方、身廊とトランセプトの屋根の復原に関しても、16世紀の改造で増築された壁を取壊すことについて異論を唱える人はヴィオレ・ル・デュクの時代にいなかった。考古学会もこの増築は単に「ヴォールトの外迫から屋根を離すため」だけと見なし、「当初の屋根は、ヴォールトの上に間隔をとらずに載っていた。…野地板の湿気を防ぐため、そして雨漏りが直接ヴォールト天井にしこまないように、外壁を高くする必要が出てきて、側壁を増築したのである。そして、その新しい壁に一連の半円窓を開け、教会堂の周囲全体に巡らせた。…それによってヴォールトと新しい屋根との間の採光と換気が確保された。市民戦争の際、これらの窓は砲眼に改造され、そこに大砲の砲身が現れていたのである」²⁴⁾とし、増築された側壁の削除に対して、大きな反対もなかったようである。しかしここで問題なのは、なぜ現状のように復原されたのかという点である。

筆者は次のように推測する。

ヴィオレ・ル・デュクは南部考古学会の提案を参考に、まず16世紀に増築された側壁を削除する決定を下し、身廊とトリビューンの屋根を別構造にする承認を得る。ヴィオレ・ル・デュクはそれに基づいて屋根形式の復原に取り掛かるが、その際に彼がトゥルーズのサン・セルナン教会堂で見いだした比例大系の調和を実現

図-6 ヴィオレ・ル・デュク介入以前の南北断面図(ボワレによる)

図-7 現状の南北断面図(ボワレによる)

するためにまったくの創作を行ったのである。それは彼が『中世建築事典』の「比例 (proportion)」の項²⁵⁾で述べた次の文章からわかる。

「南仏のトゥルーズのサン・セルナン教会堂は、このようなギリシア・ローマ的影響の、もっとも完全で生き生きとした刻印を押された記念建造物のひとつである。そこには東ローマ帝国のギリシア人たちがローマ式建築に適用した比例の諸原理が示されている。実際、サン・セルナン教会堂で用いられた比例の体系は、内部から外部へ発出しているのである。そして、その比例大系は正三角形と直角三角形に基づいている。…この比例大系から、サン・セルナン教会堂の建築家は直角三角形と正三角形の二つの三角形の線上に彼の建築の比例を従属せたと見なせる。なぜなら、すべての階で目を止める点というのは、45度と60度の傾きをもつ線上にあると考えられるからである (図-8、図-9)。建物の輪郭は、これらの傾きの線上のいかなる点からも外れることはない」²⁶⁾

このように、ヴィオレ・ル・デュクがサン・セルナン教会堂で感じた調和の秘密は、外観の全体的規則性と室内のヴォリューム構成との正確な符合に由来するとし、そのために屋根の形態もトリビューン、身廊、1階側廊の内部構成をそのまま表出していなければならないと考えたのである。そして、外観と室内の比例大系は正三角形と直角三角形の線上、つまり45度と60度の傾きをもつ線上に主要な点がなければならないとし、トリビューン

と1階側廊の軒の位置が決められた。そして身廊の天井裏に換気と採光のための窓を開ける際も、その窓の形態を45度の線に沿った菱形とした。トリビューンの屋根は四分の一円ヴォールトの外迫に沿って勾配が決められ、身廊よりも若干急勾配になる。さらに後陣に一部が残存していた飾持送の付いた雨樋付コーニスを南北ファサード全体に復原した。このコーニスは当初からのものではなく、16世紀に付設された後補の雨樋だが、雨仕舞のために必要だと判断して復原したのである。それは、ヴィオレ・ル・デュクが『中世建築事典』の「修復 (restauration)」の項²⁷⁾で述べている例とよく似ている。

「例えば12世紀に建てられ、屋根の軒先に雨樋のない建物が13世紀に修復され、排水溝を含む軒樋が付設されることになった。その後壁頂部が全体的に悪い状態になり、すべてを再建しなければならなくなった。他で見られるような12世紀の古いコーニスを再び設け、13世紀の雨樋を除去するだろうか。確実に否である。12世紀の形式を保存しつつ、13世紀の軒樋付コーニスを再建する必要がある」²⁸⁾

ここで異なる点は13世紀の技術的改良がサン・セルナン教会堂の場合は16世紀に行われていたというところだけである。このようにして、軒樋付コーニスが全体的に付加されたのである。しかし、トリビューン屋根の軒先と復原したコーニスとの間に小壁が生じてしまった。ヴィオレ・ル・デュクは、計画の段階ではこの間隙部分に何も手を加えないつもりだった。しかし、実施さ

図-8 断面寸法における比例体系 (『中世建築事典』より)

図-9 室内と外観の立面構成における比例体系 (『中世建築事典』より)

図—10 ヴィオレ・ル・デュクによって創設されたコーニスとロンバルディア帯

れる段階でロンバルディア帯を全体に入れてしまったのである(図—10)。その結果ロマネスクの簡素で、強健な外観を大きく変えてしまうことになる。そして身廊とトリビューンの屋根を別構造に分けたことによってトランセプトのファサードの寄棟屋根も切妻と寄棟が混合した異様な形態にせざるを得なくなってしまった。ヴィオレ・ル・デュクのこうした復原は明らかに行き過ぎた「様式統一 (unité de style)」であり、彼が見いだした比例大系の調和を実現するためになされた蛇足的復原だといえるのである。

5. 結 語

ヴィオレ・ル・デュクが修復における最重要の条件として述べているのは、「取り替え部分はすべて以前のものより上質な材料と、より効果的、より完全な方法によってのみ代用すべきである。…修復後の建物は、それまで経てきた時間よりも長く、いつまでも立ち続けなければならない」²⁹⁾ということである。それは、材料の交換において以前より上質なものをを用いることと、堅牢性を保証するためには以前からの構造形式を変更しても構わないということを意味している。また「これらの建設方法は相対的な価値を持つものであり、必ずしも良質であるわけではない。そのうちのいくつかは欠陥があり、放棄されねばならなかった」³⁰⁾とも述べており、当初からの構造形式であっても欠陥のあるものは改善すべきだとしている。

トゥルーズのサン・セルナン教会堂においてヴィオレ・ル・デュクは、この修復の基本に従って、当初材より堅固と思われたカルカソヌの石を交換材として選び、「いつまでも立ち続けられる」ように、新しい屋根形式に改善した。しかし、実際にはヴィオレ・ル・デュクの修復は百年を経て、色あせてしまい、再び修復しなければならない状況となった。それは、ヴィオレ・ル・デュク自身が述べているように、修復建築家としてもっとも恥ずべき結果となってしまったのである。そして、

地方の建築様式、構造、材料に関して深い知識をもつ建築家が修復に当たるべきだ、という基本を自ら実証したわけである。

注と参考文献

- 1) Abbé M.-B. CARRIÈRE, Visite à Saint-Sernin, XLème Congrès Archéologique, Toulouse, p.403, 1876.
- 2) イコモス・フランス支部総会が1980年4月22日から25日までトゥルーズで開催され、ヴィオレ・ル・デュクを中心とした19世紀の修復をテーマにしたシンポジウムが行われた。当日発表者が配付した資料のうち本稿に関連するものは、以下の通りである。
Francis SALET, Saint-Sernin de Toulouse.
Marcel DURLIAT, Les restaurations monumentales dans la partie occidentale du Languedoc -XIXème et XXème siècles.
Yves BOIRET, Les problèmes de restauration à Saint-Sernin de Toulouse (1969-1980)
- 3) Yves BOIRET, Saint-Sernin de Toulouse : restauration des couronnements et toitures, *Icomos information*, pp.3-11, No.3-1990.
- 4) Pierre MONJOIN, L'œuvre Toulousaine de VIOLLET LE DUC, *Mémoires de la Société Archéologique du Midi de la France*, Tome XXV, 1957. を主に参照。
- 5) トゥルーズのサン・セルナン教会堂の沿革については、Francis SALET, *op. cit.*, E. DELARUELLE, *Saint-Sernin*, La carte du ciel 21, Zodiaque, La pierre-qui-vire, 1975.などを参照。
- 6) 側壁を増築した時期については、南部考古学会はカルヴァン派が立てこもる前にすでに採光・換気用に行われたとしている。(Monographie de l'insigne basilique de Saint-Sernin, Toulouse, p.83, pp.136-137, 1854).
一方ヴィオレ・ル・デュクを補佐した地元の建築家エスキエは、カルヴァン派の占領時になされた増築だとしている。(J. ESQUIÉ, Notes sur les travaux de restauration récemment exécutés à l'Église Saint-Sernin, *Mémoires de l'Académie des Sciences de Toulouse*, 1881, p.294.
- 7) Prosper MÉRIMÉE, *Notes de Voyages* (Paris : Librairie Hachette, 1971), pp.231-236.
- 8) Ibid., p.233.
- 9) Archives des Monuments Historiques, 523, Saint-Sernin (1835-1898).
- 10) Prosper MÉRIMÉE, Lettre à Vitet, le 21 août, 1845. (Marcel DURLIAT, Toulouse : La restauration de l'église Saint-Sernin, de l'ancien collège Saint-Raymond et du donjon du Capitole, *Catalogue Viollet-le-Duc*, p.105, 1980).
- 11) エスキエについては、詳細はわからないが、反ボザール派のデュバンの古い弟子だったことは知られている。そんなことからヴィオレ・ル・デュクのお気に入りの建築家だったに違いない。
- 12) J. ESQUIÉ, Notes sur les travaux de restauration récemment exécutés à l'Église Saint-Sernin, *Mémoires de l'Académie des Sciences de Toulouse*, 1881.

- 13) Ibid., p.153.
- 14) 「様々な組合の職人とカルカソンヌ石が南フランス鉄道局に買占められた。そのために、大工、石工、石切り工、たちが手間賃の値上げを要求しだし、6月一杯はストライキまでおきてしまった」(J. ESQUIÉ, *op. cit.*, p.158)
- 15) 拙稿『ヴィオレ・ル・デュクによるトゥルーズのサン・セルナン教会堂の修復(その2)』, 日本建築学会大会講演梗概集 9142, p.2788, 1980, を参照。
- 16) J. ESQUIÉ, *op. cit.*, p.157.
- 17) Yves BOIRET, Les problèmes de restauration à Saint-Sernin de Toulouse, p.6, (1969-1980).
- 18) 例えば、アンティム・サン・ポールは、「サン・セルナン教会堂の修復は、ヴィオレ・ル・デュクの作品の中でもっとも劣悪な例の一つである。なぜなら地方美の要求と慣習に合わせようとする気遣いがまったくなかったから」と述べ、南フランスの建築様式や材料についての無知を指摘している。(Anthyme Saint-Paul, *Viollet-le-Duc. Ses travaux d'art et son système archéologique*, Tours, p.44, 1881).
- 19) 拙稿『ヴィオレ・ル・デュクによるトゥルーズのサン・セルナン教会堂の修復』, 日本建築学会関東支部研究報告集, 17, pp.139-140, 1980, を参照。
- 20) Pierre MONJOIN, *op. cit.*, p.159.
- 21) Abbé M.-B. CARRIÈRE, *op. cit.*, p.403.
- 22) E.E. VIOLLET-LE-DUC, *Dictionnaire raisonné de l'architecture française XIème au XVIème siècle*, 1854-1868; tome V, pp.9-24, 1861.
- 23) Ibid., p.20.
- 24) Société Archéologique, *Monographie de l'insigne basilique de Saint-Sernin*, Toulouse, p.83, pp.136-137, 1854.
- 25) E.E. VIOLLET-LE-DUC, *op. cit.*, tome VII, pp.532-561, 1864.
- 26) Ibid., p.539-541.
- 27) E.E. VIOLLET-LE-DUC, *op. cit.*, tome VIII, pp.14-34, 1866.
- 28) Ibid., p.24.
- 29) Ibid., p.26.
- 30) Ibid., p.24.

(1990年12月10日原稿受理, 1991年4月10日採用決定)